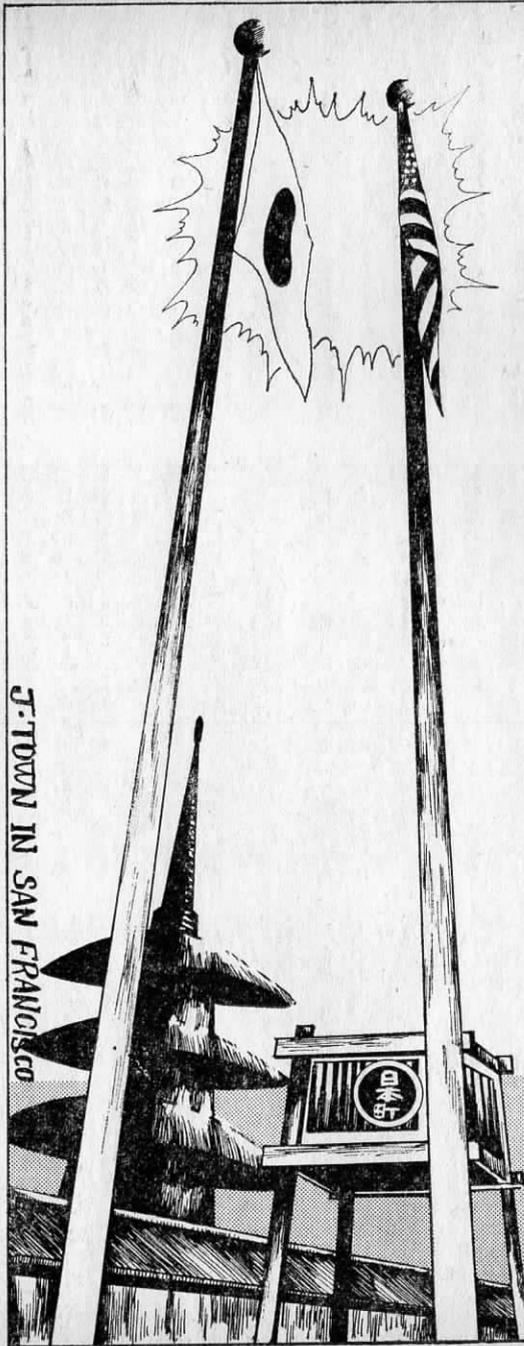


サンフランシスコからのレポート…

日本を見抜いた日系二世たち 森ただし

アジアばかりでなく、おやおや、アメリカのサンフランシスコにも日本の企業はやってきて、大好きな「開発」を始めました。「日本人」が「日系人」を追い散らして、ああ、ここにも三里塚が……



J-TOWN IN SAN FRANCISCO

「お前らはたかが日系人……」

「アイ レフト マイ ハート……」そして「サンフランシスコのチャイナタウン……」こんな歌で知られているサンフランシスコは日本人に、もうすっかりおなじみの街だ。なだらかな大小の丘と、その丘を覆うような白っぽいビクトリアンハウスの群れ、そして、その建物をひきたたせるまっ青なぬけるような空、赤・白・黄・黒と、いろんな肌の色をした、人なつっこいひとびと。アメリカ人が口をそろえて「大好きだ」というこの町は、どこか人をほっとさせ、のんびりできるふんいきをもっている。

ながい苦しい航海のあと、勝海舟らの幕府使節の軍艦「咸臨丸」が錨を下したのもここだし、太平洋を単独ヨット航海してゴールデングेटブリッジをくぐり、「ヤッタデー」と叫んだ堀江謙一さんが着いたのもここ。第二次大戦が終って、日本が平和条約にサイン

したのもここ、サンフランシスコだった。こんなふうに、合州国の西の玄関サンフランシスコ市と日本との関係は深い。

もう一つ、この関係を深めているのが、この市に住む日系人だらう。二〇世紀はじめにこの市にやってきた日本人バイオニア以来、かれらは、日本と北米合州国のはざまに生きてきた。たとえば、第二次大戦中、日本が太平洋戦争をはじめたばかりに、米国本土の日系人は、戦時強制収容所に入れられ、合州国か日本かの踏絵をふまされた。そして、日本をとった人々は、強制的に送還され、合州国を選んだひとびとは、徴兵され、ヨーロッパ戦線で戦わされた。これは、合州国に生まれ米国市民権をもっている二世が、日本人の血を引くばかりに飲まれた苦汁だった。そしてひとびとは今も、その悪夢を忘れきれないという。

この市の一面に、日系人が「ニホンマチ」と呼び、ほかの人種のひとつが「ジャパントウン」と呼ぶ地域がある。ここで、今、起きている事件も、日本と関係が深い。それはこの「ニホンマチ」地域の再開発の問題だが、これに反対して立ちむかっているのが日系人

だからということではなく、その相手が、市と日本企業だという意味で関係が深いのだ。ここでもまた「日本」が問われている。

この「ニホンマチ」には、日系人が一九〇六年のサンフランシスコ大震災のすぐあとから住みつきはじめ、例の強制収容所に入れられた時期を除いて、サンフランシスコの日系人の中心だった。とくに、日系人が、人種的偏見や英語の不自由さのためによい職につけなかった時代には、日系人は、ここで仲間として助け合い、自足的なコミュニティをつくっていた。また戦後になっても、その勢いはおとろえず、この街を核として、そのまわり約二〇ブロック（ここでは一ブロックは七〇×四〇メートルぐらい）の区域に、市内の日系人口の三分の二におよぶおよそ五、六千人が暮らしていたという。そのころは、ホテル、レストラン、料理屋、バー、八百屋、荒物屋、学校、教会、寺、そして店舗、二階・三階建のアパートなどが軒をならべ、夜中すぎにも人通りが絶えず、たいそうにぎやかな活気のある街だったらしい。

しかし、往時の繁栄を今この街で見出すのは難しい。今は、かつての半分、一〇ブロッ



左写真「開発」の終わった道路左側部分。加州
東京銀行、日本領事館などが並ぶ



右写真 とりこわしが近く迫ったニホンマチ

旅行もここまで完成しているかとおどろくくらいだ。

キンテツは、旅行者の落す金を、これでもか、これでもかと直接あるいは間接（店舗の家賃）に拾いあさるわけだ。これでは、地元の日系人社会に金の落ちる方が不思議なくらいだ。さらに米国内からの観光客は、「ニホンマチ」より「ニホン・ショウヒン」への興味が強く、ショウウィンドウの中のカメラ、車、テレビを、立ちどまってはじつとのぞきこんでいる、かれらのその姿はもうめずらしくはない。

このようなことが日系人を少しづついらだたせはじめ、さらにここに集まってくる日本からの日本人、中でもビジネスマンに対する反感がそれをかきたてた。「旅の恥は掻き捨て」なかどうかは知らないが、ここに駐在する日本人ビジネスマンは、二つの顔をもって日系人に接しているようだ。一つの顔は、商売のさいの「同じ日本人同士じゃないですか、よろしくおねがいしますよ」という甘いもの、「こっちは正統日本人、お前らはたかが日系人」という偏見にゆがんだのがもう一つの顔。だから日系人は一般に、「日本

ク「ニホンマチ」は、さながら一本の道ではさんで、二つの街をつくっているかのようだ。一方は、近代建築の高層アパートがブロック、そして、白壁づくりの日本趣味で三ブロックに連なる日本総領事館、都ホテル、そして日本からの進出企業のショールーム（日産、日立、三菱、キッコーマン）、そして事務所（シエトロ、近畿日本ツーリスト、キンテツ・エンタープライズ・オブ・アメリカ株式会社）、店舗（加州東京銀行、紀伊国屋書店）、日本から進出したレストラン、土産店、温泉、劇場などをつつみこんだ日本文化貿易センターがその街だ。

そして他方は、五〇年はたっているだろうと思われる、まるとい窓が楽しいビクトリアンハウスの町並で、食堂、寿司屋、お菓子屋、金物屋などが、古いこの町の面影をかすかにとどめてはいるもの、点在する空地、朽ちかけた家、新築中のアパートが「再開発」の将来を暗示している街だ。

この街が、今のよう姿を変えたのは、約一五年前の、第一期再開発にさかのぼる。この街の半分は、この工事によって「近代化」されたが、このために、この四ブロックの地

域から約一千人の日系人が立ち退かされたのだ。しかも、当初ここに住んでいた住民は、市の再開発局（RDA）、そしてこの開発当事者になる予定の日系人事業家から「皆さんに立ち退いてもらって、日系人文化センターをつくるんです。これは、ひいては皆さん日系人のため、わたしたち全体のためなんです」と言われて、それを信じこみ、同じ日系人のため、子供たちのためと思って、住みなれたこの街を去っていったのだ。

しかし、はじめに計画をたてた日系人の事業家が資金ぐりでもたつき、それをあきらめ、新手的開発者があらわれるまでの六年間、この敷地は、草ぼうぼうの空地として放っておかれたのだ。そうして、この計画の新聞発者として名のりを上げたのは、キンテツ・エンタープライズ・オブ・アメリカ社と、ナショナル・ブレイマー社だった。そしてこの二社が建てた前記のホテル、貿易文化センタービルなど巨大な建造物は、ここを立ち退いた人々がアゼンとしたほど、聞かされたものとは違っていたのだ。

「チクショウ、だましたな」とくやしがりながらも「できてしまったんだ、しかたがない

サ」というのが「おとなしい日系人」と呼ばれたこの住民だったひとびと一般の反応だった。

こうして、街の半分を切りとられた「ニホンマチ」は、ビジネスマンと日本からの観光客あての建物群ができて「開発」された以後も、残った小商店と住民が助け合って先ほそりになりながらも生きながらえてきた。新しいビルを訪れる日米の観光客は、バスから降りるとさざと記念写真を撮り、このビルの見物をし、街を少しの間だけぶらついて、また去ってしまい、かれらがこの日系人社会に落とす金もへってしまった。

どうしてかという、観光のしくみと、その見物の目的が、このビル新築以来かわってしまったからだ。というのは、日本からの観光客の場合は、極端な例を上げれば、近畿日本ツーリストのグループ・ツアーに参加し、サンフランシスコ到着第一夜から、この都ホテルに泊まり、キンテツの関連会社となっているグレイライン観光バスで市内めぐり、貿易文化センター内で食事をし、お土産もこの中という、ふしぎなくらいよくできたキンテツ・ツアーをさせられるからだ。バック

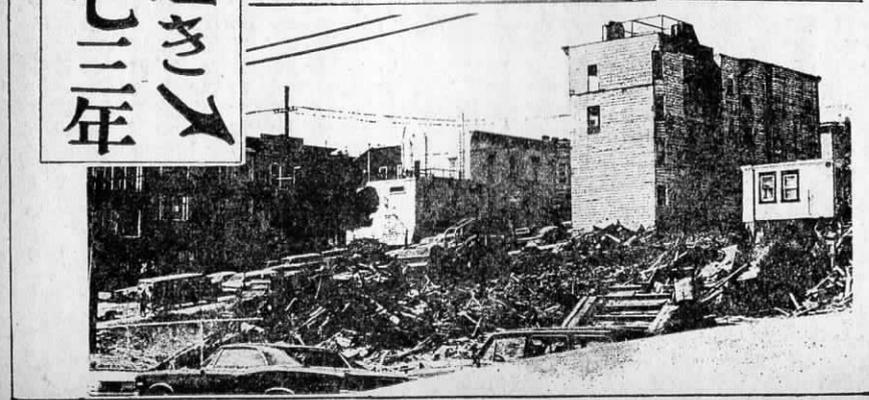
立ち退き反対委員会から出されている新聞“NEW DAWN”の日本語ページ上の写真は太平洋戦争中、戦時強制収容所に連行される日系人下の写真はとりこわしが始まった現在のニホンマチ



強制立ち退き 一九四二年

一九四二年、合法的な
合法的な立ち退き反対委員会
（CANE）は立ち退き
とたたかいた。第二歩
を踏み出した。

強制立ち退き 一九七三年



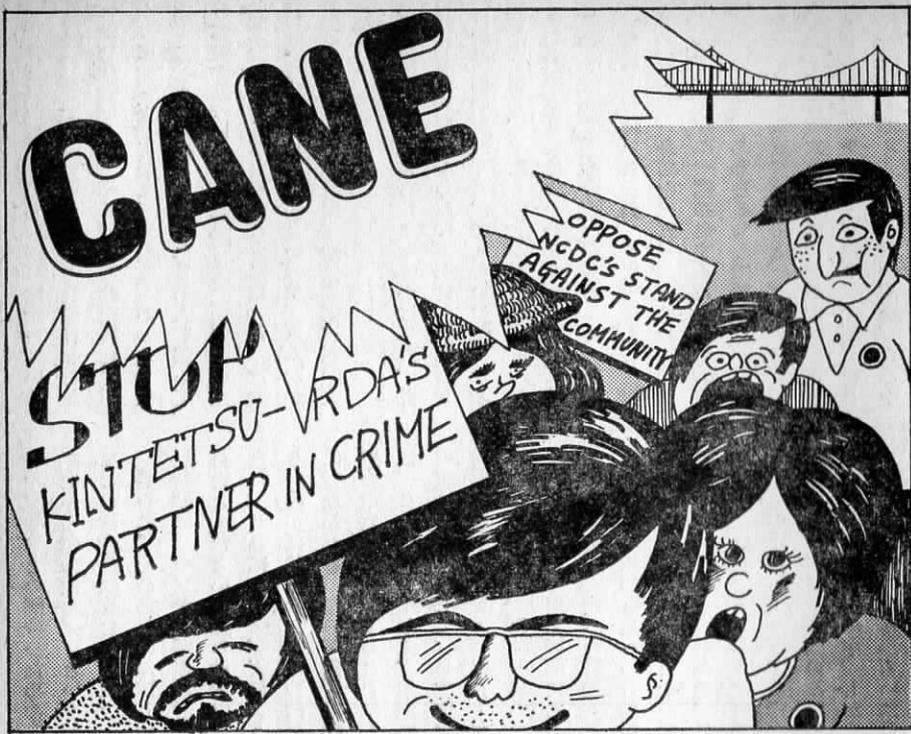
人」に対して複雑な不信感をもっている。白人の人種差別をうけ、ジャップ、ニップとさげすまれてきた日系人達が、日本人、父祖の国からやってきた人間に、「バカな日系人」と言われては、「日本人よお前はやっぱり、名譽白人か、オレ達を見下しているんだな」と心の中で思ったとしても無理はない。悪いのは、日の丸を引っさげて、植民地の支配者顔をして、日系人社会に出かけていく、「日本人」なのだから……。

英語で抵抗する日系三世

静かに、しかもねばっこい不信感が日系人の心に沈着していたその時、第二の再開発計画がはじめられた。一九七一年暮からはじまったこの開発計画は、「ニホンマチ」の残りの五ブロックについてのものだった。そして計画によれば、一ブロックに、日系人を信者にもつ教会の連合体である日米宗教連盟が施工者となる低・中家賃住宅と、老人センター、

残りの四ブロックは、商店、高・中層アパートが建てられる予定だ。
しかし今度は、このマチの中にも、以前とちよっとちがう勢力があった。それは、J・タウン・コレクティブという日系三世の運動体だった。この運動体は、もう二〇〜三〇歳になっている三世が、黒人の反体制闘争に刺激され、ベトナム反戦運動、それとからまる大学闘争を経過する中で急進的になり、その結果生まれたものだった。かれらは「従順な日系人」ではなく「権利意識に目ざめた抵抗する日系人」だ。二世が悪夢として語りたがらない戦時強制収容所の問題を人種差別と結びつけて告発したのは、戦争を知らない、日本語を全くしゃべれないかれらだった。
そのかれらは、この問題を聞きつけてから忙しい日々を送らなければならない破目になった。かれらは、まずはじめに住民でこの問題に深い関心をもっているひとびとと会い、一緒に、この立ち退き「再開発」に反対する団体をつくるために走りまわった。また、市内の日系人にこの問題を知らせるための夕食会を兼ねた集いを催したり、団体創立にむけての準備を重ねた。こうして、この団体「日

本町強制立ち退き反対委員会」(CANE=Committee Against Nihonmachi Eviction)ができたのは、昨一九七三年二月だった。老人から青少年まで、各世代を貫く一世、二世、三世が顔をそろえた会議は和気あいあいといったものだった。ただ、英語の話せない一世、帰米二世(合州国で生まれて、教育をうけるために一時日本に滞在、こちらに帰ってきた二世)と、日本語がほとんど解せない三世とは、お互い話を通じないという苦勞があったが……。
そうこうしているうちに、この計画の一番手だった、宗教連盟の住宅予定地に住んでいた住民に、九〇日として次に三〇日以内の立ち退き通告が、再開発局の方から送られてきた。すでにこの時までには、反対委員会は、会の目標として、
(一)、日本町の破壊と拡散をくいどめ、住宅と小商店地域としてとどめおく。
(二)、住民と小商店の権利を擁護する。
(三)、住民と小商店の権利を擁護して、この一番手計画は日系人のために建てられるものと判断した。この他のブロックに建設が予定されているアパートは高家賃のため、とても



「…今や私は決心しました。ここに住んでいる人々は闘うべきだと思います。自分たちの権利を確保することが本当に必要だと思うのです。…以前には、通りに面して色々な家や教会を眺めわたせたものでした。それから一つ一つ、人々が去り、毎日火事が起り、通りは見苦しい場所になってゆき…」日系三世、ナンシー・インダ、学生

う市は信用できない。あの会社に入っている店をポイコットしようじゃないか」ひとびとは口々に叫んでいた。

しかしその後、反対委では、ポイコットの方針は、より大きな「ニホンマチ」内部の摩擦をおこし、キンテツが漁夫の利を得るだけだろうというわけで見合わせることに決めた。

この間も、用地上の建物には一〇人以上の住民が住んでいた。残ったF老夫妻、一世のYさん、Kさん家族、Hさん家族、これらのひとびとは立ち退きをしたくなかった。ところが、取り壊された建物の隣りのビルに住むFさんとYさんの場合、そこも空き家だろうとコソ泥たちに目をつけられ、何度か裏口から侵入され、反対委の若者が夜泊りこんだり戸を補強したりしたが、不安のため眠れなくなった老一世たちは、ついに引越を決心せざるをえなくなりました。

「移民」政策は
「棄民」政策だった

住民は立ちもどって住むことは出来ない。

「ニホンマチ」住民にとって立ち退き後帰ってこれるのはここだけ、という理由でこの一番手計画には賛成を公言したのである。そこで、反対委がした仕事は、住民のための家さがし、当局との、引っこし期限の延長と立ち退き補償のかけあい等だった。そしてこの地区の住民が移動し終ったのは昨年夏だった。

この地区がかたづいた後、再開発局がとりかかったのは、残り四ブロックについてだった。これが問題の地域だった。なぜなら、キンテツが、ここでも開発者として顔を出したからだ。反対委の活動は、目標「ストップ・キンテツ」にしばられた。

キンテツは、ここで二つの建物を予定している。一つはボーリング場、一つは「キンテツ・サンフラーワー・モーター・イン」というモーターだ。反対委によれば、この二つの建物が完成するとキンテツは、全「ニホンマチ」の二五%以上の不動産をもつこととなり、「ニホンマチ」は「キンテツマチ」に変わってしまうという。巨大な資本をもって、その力にまかせてこを乗っ取り、思うがままにしようとするキンテツはかれらにとっては許

しがたいものだ。

反対委の中の一人は怒りをこめて言う。「どうしてキンテツが、この市のどこでもなく、ニホンマチにたかを考えなくてはならないと思う。かれらは、日系人社会の向上とかなんとか言うけど、ぼくのいいいさん達がつくってきたこの日系人のニホンマチを利用して、一儲けたくらんでいるだけなんだ。」

かれらは、既に一度口車に乗せられているだけに、二度も同じ誤ちはくりかえさないと心に決めている。そして、アメリカ人少数者としての自分と、日本企業とをハッキリ対置させようとしている。しかし、状況は、だんだんさし迫ってきた。それにつれて、反対委も内部の再編成を計り、以前にもまして住民や報道関係への働きかけに精力をそそいだ。

一二月下旬、反対委は、再開発局がホテル用地の上に残っている建物の「とりこわし許可」を得たという知らせをうけた。これは、再開発局が、土地の買収、住民の立ち退き、建物のとりこわし、整地の最後まででの法的手続きを完了したことを意味していた。これが認められれば、あとはキンテツの手に土地の所有権がうつるわけである。ことはいよ

いよ大詰めとなった。

市の許可再審査委員会に不服・再審査の申請が出された。審査の公聴会は、二月一七日に開かれた。この日、市庁舎で開かれた公聴会には、三世の若者をはじめ、仕事をこのために休んだ二世、そして三世の車でここまでやってきた一世の老人たち、約二〇〇人が集まり、よく晴れた青空の中を飛びかう鳩ともめの下で市庁舎前集会を行ない、午後二時からの公聴会を待った。

いよいよ公聴会は開かれたが、これがまた「民主主義的手続き」のためだけにあるような機関で、反対委の不服理由説明の時、議長はそれを数度にわたって妨げ、当局とこの用地をキンテツに割り当てた日本町開発会社からの発言者の時はうなずくばかり、そして審判の結果は、「この許可は正当で合法」というものだった。

ここに参加した住民の帰りがわの形相は迫力があつた。みんなの顔が怒っていた。それも、負けたのがくやしなかったためではなく、その審議のやり口と、日系事業家で作られている日本町開発会社(NCDC)が公然とキンテツ支持を言っていたからだだった。」も

反対委の活動家が忙しい毎日を送っているうちに、この団体も第一年度の誕生日をむかえることになった。そこで、これを機会に、

すでに立ち退きを終えて足の遠ざかった元住民やこれまで支援してくれた日系人を招いて、「日本町強制立ち退き反対委員会」周年記念夕食会」をしようということになった。夕食の方は、パト・ロック式といって、みんなが料理を持ちよるやり方で、動員目標三五〇人と決められた。

事務所の電話が休むひまなくかけられ、外を飛びまわって、しらみつぶしに住民に働きかけ、印刷物をつくり、出しものの歌、寸劇のケイコをし、くたくた一歩手前に、その日、一九七四年二月二日はやってきた。開場は五時半だったので、その頃から、ボール、なべ、皿を手にした反対委員会、住民、そして後援者がつめかけ、会場の三五〇人分の席は一杯。みんな、こんなに一堂に会することは年に何度もないので、あちらこちらで話に花が咲く。いよいよ食事をすませると、プログラムがはじまり、琴、太鼓の余興、その次は、反キソテツの教育スライド・ショウ、寸劇、そして反対委代表のオノ・ガイ君の演説、この中

でキンテツとの闘争のための支援を、中でも二世からの後援を、という趣旨が訴えられてこの夕食会は幕をとじた。

さらに、そのあとのおんびりする間もなく、反対委は、キンテツが用地所有許可と建設許可をとったという知らせを二月中旬うけた。また、これについて、どのようにするかという討論がはじまった。その結果、二月二五日に行なわれる、市の不服再審査委員会に許可不服の申立てを再度することにし、さらに今回は、これだけではなく、用地における何らかの直接行動、そして、日本文化貿易センター内にあるキンテツ・エンタープライズ・オブ・アメリカ社、市、再開発局へのデモ、さらに日本政府の出入機関であるサンフランシスコ日本総領事館への行動も予定している。もし、この総領事館への行動が実現すれば、この闘争は、日本企業とその活動を黙認かつ追認している日本政府への、日系人からの鏡いつきつけとなるだろう。日系人に離縁状をたたきつけられようとする日本政府そして日本企業は、アジア各国のみならず、一番の友好国の北米合州国の中、しかも、もつとも親日的であると考えられていた日系人社会から

のこの告発に、どう答えてゆくのだろう。

日本の社会・経済構造からはみ出し、遙かなふるさとの山や川をあとに海外に移住していった移民の子供、孫たち。かれらはここにきてまで「日本」に抑圧されるとは考えていたろうか。北米合州国と日本を相手に、現実的勝目のない抵抗を、明るい顔をしてやってゆく日系人の老人たち青年たち。「さよなら、もう顔も見たくない」と彼らに言われた彼らの「祖国」そしてほくの国、日本。老いも若きも、世代を貫いての独自の運動の戦略を創り出し、朗らかな笑いを失わずに闘いつづける、くつたかないかれらに惚れこんだほくも、小さな声でいいから言ってみよう。「さよなら日本」と。

この運動についての支援の手紙、お問い合わせは左記まで。

CANE (Committee Against Nihonmachi Eviction)

1858 Sutter St., San Francisco, California 94115 U.S.A.

この記事を書くに当たって、いろいろな人のお世話になりました。とくに日本町強制立ち退き反対委員会の活動家の皆さん、そして資料を提供して下さいました北米毎日の清水社長にこの場を借りて感謝します。(筆者)

絵 戸井十月

「日本への三下り半」を書けとおっしゃるのですね。

それは、たとえば雑誌『終末から』へ三下り半を書くようにとのお言葉だと存じますが、契を結ぶ意志もなく、その折の記憶さえありませんのに、ほらほら液体がきしんでいるよ、とさしのぞかれ、「日本」は肉体内にも心理にも、まことにつらうございませぬ。

記憶をさかのぼるほどに茫々として、あなたさまがいつ私を愛されましたものか、ものごとろついでみれば、あなたさまはしきりにその舌で私をなめまわしておられたのぞいませぬ。ごらん、黄色いんだよ、おまえも、とて私の羞恥心をはぎとろうと、あくなき波長をそそぎ、



日本への三下り半

絶望の叫びを放てば、にこつとわらい、ほらごらんおまえ、日本語だよ、とて耳のくぼみにすらあなたさまは唾液をおとしこまれたのぞいませぬ。吐く息すら、味噌のにおいに染められ、もはやかくなるうえは心やさしき阿部定伝説にならい、ひとおもいに愛憎のみなものと断ち、それをペンダントにして旅行かんと、がたがたと骨までふるえつつ或夜……ところが、でございませぬ。ないのでございませぬです。それが。

切なきあなたさまへ

森崎和江

ああ、ないのですか、あなたさま。「わが身は成り成りて、成りあまれるところひとところあり」などと、私めをおだまし

果てたあなたさまの背を撫でております。あなたさま。ここは奈落。くさりましたものか萌えいずるきざしなのか、亡霊どもが嘔吐したくさぐさの集積が、折々、ひかるともなく匂います。あなたさまのかなしい正体を知った者どもも、さすらいの場です。いえない、あなたさまの、あくなき愛撫によって日本語しか話せない姿となりはてた肉たちの、自愛の洞穴でございませぬ。あなたさま。これは賭でございませぬ。自愛の果に、はたして、いのちは生まれるや否や。むかしむかし、どこやらのくにでは、ないないづくしにて子をはらみましたとか、根も葉もない噂でございませぬ。さりとて、切なきあなたさま。私は奈落の神々と肌すりあわせ、あなたさまのそれをおつくり申します。ええ、ええ、たんとお笑いくださいませぬ。からからとお笑